

## 第5回 奈良女子大学

# オリンピック・公開シンポジウム ／全学研究交流集会（第4回）



# 科学技術が変えるオリンピックの現在と未来

**日時** 2017年12月3日（日）  
14時～16時15分

**会場** 奈良女子大学記念館

## シンポジスト

**美馬達哉**（立命館大学教授）  
「エンハンスメントとオリンピック」

**新倉貴仁**（成城大学講師）  
「デジタル化する社会とオリンピック」

**中田大貴**（奈良女子大学准教授）  
「脳が科学するオリンピック」

コメンテーター

**西山哲郎**（関西大学教授）

コーディネーター 井上洋一（奈良女子大学教授）  
石坂友司（奈良女子大学准教授）

主催 奈良女子大学生活環境学部心身健康学科スポーツ健康科学コース  
共催 奈良女子大学研究企画室

入場無料／事前申込不要

## シンポジウム開催の趣旨

2020年東京オリンピック・パラリンピックが開催される。オリンピックはスポーツの競技大会であると同時に、文化的プログラムでもある。東京大会について考える際に、このムーブメントがどのように歴史的・社会的に継承されてきたのか、そしてそこに東京、日本がどのような意義を新たに書き込めるのか、といった問いを立てることにとどまらず、オリンピックとはどのようなイベントであるのか、それを開催するということが東京という都市や日本に何をもたらすかという視点を付け加えることによって、この大会はより奥行きを持って論じられるだろう。

第5回目となる奈良女子大学・オリンピックシンポジウムは、科学技術とスポーツの親密な関係性について議論する。トップアスリートは言うに及ばず、スポーツはもはや、さまざまな科学技術の存在なくしては成立し得ない。アスリートのドーピングはカジュアルな現象として経験され、正常／異常な身体の境界は揺らいでいる。また、競技はコンマ差を競い合い、もはや私たちの理解を越え出た微細な領域へと歩を進めている。

本シンポジウムでは、オリンピックそのものの変化が、すでにスポーツがもつ本質を措定する近代との対比の中では論じ尽くせなくなっていることを明らかにし、ドーピングする身体、デジタル化する身体、科学化する身体といった切り口から、その現状と未来をどのように考えたら良いのかについて展望してみたい。

## アクセス

近鉄奈良駅1番出口より徒歩5分。  
正門よりお入りください。  
お車での来学はご遠慮ください。



## 登壇者

### シンポジスト

#### 美馬達哉 (立命館大学教授)

「スポーツを手がかりに考えるエンハンスメント」 (2016, 森下直貴編『生命と科学技術の倫理学——デジタル時代の身体・脳・心・社会』丸善出版, 72-89)

『生を治める術としての近代医療——フーコー『監獄の誕生』を読み直す』 (2016, 現代書館)

#### 新倉貴仁 (成城大学講師)

『「能率」の共同体——近代日本のミドルクラスとナショナリズム』 (2017, 岩波書店)

『都市とスポーツ——皇居ランの生—政治』 (2015, 『iichiko』 126: 83-96)

#### 中田大貴 (奈良女子大学准教授)

“Sports Performance and the Brain” (2015, *Sports Performance*, Springer, 3-12)

“Characteristics of the athletes’ brain: evidence from neurophysiology and neuroimaging” (2010, *Brain Res Rev.*, 62: 197-211)

### コメンテーター

#### 西山哲郎 (関西大学教授)

『科学化する日常の社会学』 (2013, 世界思想社)

『近代スポーツ文化とはなにか』 (2006, 世界思想社)

### コーディネーター

#### 井上洋一 (奈良女子大学教授)

#### 石坂友司 (奈良女子大学准教授)

お問い合わせ先

奈良女子大学スポーツ健康科学コース 石坂友司 E-mail: yishizaka@cc.nara-wu.ac.jp / TEL/FAX: 0742-20-3347